あの夏の花火

丸山 かおり［大阪府］

二歳の時に母が亡くなり、以来私はずっと父と二人で暮らしてきた。ただ一人の家族である父との思い出が、実はあまりない。幼い私を抱えての父は、仕事と家事と育児に追われて、心にも時間にも余裕がない生活だった。

父は、いつも眉間にシワを寄せて、近寄りがたい雰囲気を漂わせていた。そんな父に向って、遊びに連れて行ってほしいとは、怖くて言えなかった。

唯一の思い出は、夏の終わりにした、花火。仕事を終えた父と手をつないで、近所の公園に行った。買ってきた花火に、父が次々に火を点けてくれた。夜空に花火が舞って、綺麗だった。すごく、楽しかった。

気がつけば、残りは線香花火だけになった。最後の一本が消えたら、楽しい時間が終わってしまう。手にした線香花火の火を見つめながら、私は泣いてしまった。もっと遊びたい、もっと父と、こうしていたい。子供だった私は、その気持ちをうまく言葉にできなかった。

父は、線香花火を手にメソメソと泣く私の頭を優しく撫でながら、

「また、来年な」

とだけ言った。父もまた、気持ちを言葉にするのが下手な人だった。

八年前、余命宣告を受けた父が病室で、

「花火がしたいな」

と言った。外出許可をもらって、車いすで夜の公園に向かった。私が花火に火を点けて、父が手に持つ。線香花火の火を見つめながら父は、

「また、来年な」

と言って、一本だけ袋に残した。

それが、父と過ごした、最後の夏だった。

遺された一本を見るたびに、あの夏の花火を思い出す。